

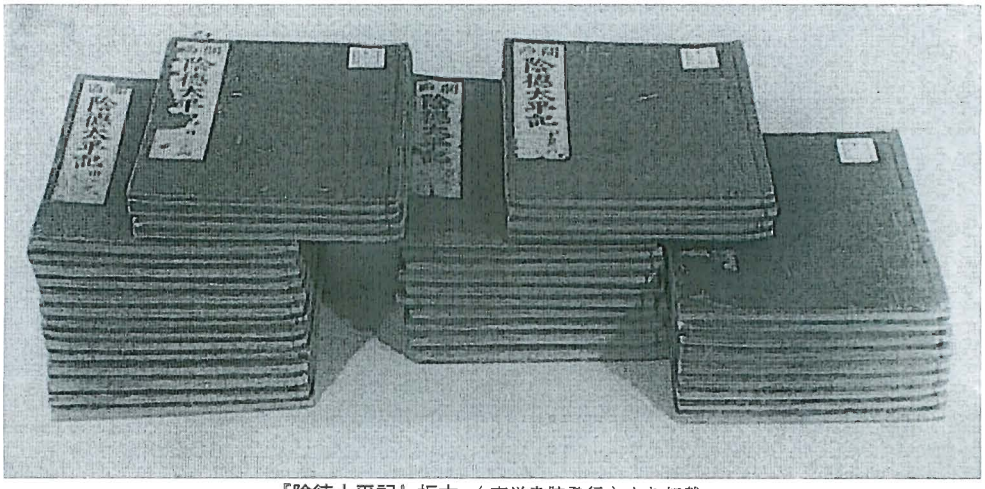
いれずみ物語 —26—

小野 友道

戦国時代のいれずみ
── 島津勢500余人、討死前夜その腕にいれずみ ──

『陰徳太平記』は全81巻と、とんでもなく大部の軍記物語である。それは16世紀の戦国時代における中国地方の地方史である。著者は周防岩国吉川家家臣香川正矩とその子梅月宣阿である。松田 修らによると、本著は「教養がたっぷりぬりこめられた、和漢混淆文体、軍記物の典型的文体もさして、個性的とは思えない。……美文体の過度過剰が特徴的」と指摘しながらも、「吉川家の検閲を受けたにせよ、私史としての自由が、しばしば正面きっての歴史の流れを抜け出して、エピソードの真実を掘り起こす。たとえば歴史の暗黒部分……が、他の軍記や実録のもたぬ的確さで、闡明され形象化されている」とも述べている。

さて、その中に「大和大納言殿九州下向附薩摩勢府内退散竝耳川城高城兩處合戰之事」の記載がある。天正15年4月16日、豊臣秀長が三原弾正忠らが立てこもる高城を攻めた。これを迎え撃った先陣島津歳久の子三郎兵衛忠親以下500人余が討ち死にしたその合戦模様である。それは「さる程に殿下、去年より九州征伐の軍議有つて、肥後口へは殿下御發向あるべし、日向口へは大和大納言秀長卿出張有つて、兩口より薩摩へ攻め入り給ふべき由を定めらる」で始まる。翌17日、島津中務大輔家久大将として二萬騎が豊臣勢を攻めるが、豊臣勢が「數百挺の鐵砲透間なく放ちければ、後陣の勢は續き得ず、先陣の者は引く事を得ず、悉く打殺さる、五十餘人を生捕つて、さて後に生けて歸さんと云ひければ、生捕の者共、是れ御覧候へ、再び歸るべからずと云ふ札を髻に付けて候、只早々誅せられよとて、頭差出して切られにけり、是を見る者、薩摩武者の勇剛の程をぞ感稱しける」と、敵である薩摩武者の猛勇振りを描いている。そしてさらに「島津勢先陣の内島津歳久の子三郎兵衛忠親を始めとして、五百餘り討たれけるに、皆二の腕に何氏何某、行年何十歳、何月何日討死と黥して在りけるとかや、敵勢は四五町引きけるが又取つて返し、黒田が陣へ懸るべき體なれば、元長より都治三左衛門に、鐵砲六十挺添へて加勢あり、黒田も今日討死と究め待つ所に、敵一町許り向の小松山の木陰に休み居て、扇を開いて汗を納れ、黒田が陣を見渡して居たりしが、如何思ひけん頓て引拂ひ歸りける、其後を見るに、手負の者共の首を打つて悉く路傍に埋めて歸りけり」とある。薩摩勢は劣



『陰徳太平記』板本 （東洋書院発行）より転載

勢、敗走の憂き目にあるが、敵ながらその潔さが語られてすさまじい。

＊

この軍記に書き留められた薩摩勢のいれずみの話は歴史上特異な位置を占める。実は奈良時代から江戸時代までは、いれずみに関する文献が見当たらない空白の1,000年といわれている。すなわち、この薩摩勢のいれずみは、その空白の中のほとんど唯一の例外なのである。

日本のいれずみの歴史といえば、まず3世紀の『魏志倭人伝』にある「男子無大小皆黥面文身」が浮かんでくる。しかし、さらにそれ以前の縄文中期の土偶に顔面線刻表現が認められ、いれずみの起源が縄文時代にあるとされている。また『記紀』にもいれずみの習俗が海人族・隼人・久米、蝦夷の人びとにみられ、畿内では鳥・馬・猪を飼育する人びとがいれずみをしていた。また刑罰としての「ひたひきざむつみ」として額・目にいれずみ（黥）がなされた。その後、律令時代からいれずみの記録はまったく見られなくなったのは前述した通りである。それが直ちに日本からいれずみそのものが消えたことを必ずしも意味してはいないようであるが、大林太良は、いれずみは日本に2回、南中国から入ったとの見解を示している。つまり、その間にいれずみがない時期が存在した。いったん消えたいれずみが、江戸時代にもう一度入ってきたというのである。そうであれば薩摩のいれずみは、さらに、きわめて例外であるといわざるを得ない。松田も言う、「もっともこれは、西隈日向の地に開花した薩摩の特殊な習俗であって、日本全般を見通せば、いうまでもなく孤絶の事例で」あると。しかしながら、筆者は忽然と薩摩のいれずみが在るとはどうしても思えない。文献には出てこないが、しかし密かにいれずみがあったと考えたいのである。いずれにしても、文献の上からはいれずみは1,000年消えていた。その間の薩摩のいれずみである。

＊

この薩摩勢のいれずみを松田 修は「薩摩男の死出立ち、死を覚悟したその夜、水仙の葉の並ぶ姿態に、青年は少年の、少年は青年の腕をとって、互みの命と、互みの愛とを、深く濃く彫り入れたものであろう。*Onomatologie* としての刺青、すなわち刑罰外、賤徴外の刺青の、それはきわだって早く、きわだって美しい開花であった」と評価している。

戦国時代において、衆道あるいは義兄弟の契りと呼ばれた男同士の性愛関係が通常的に見られた。特に武士の間で、「男色は陣中の徒然を慰める戦国の遺風で、士風を振興し国家の元気

を養ふ道だ」(『社会百面相』、内田魯庵、明治35年)とされた。儒者大田錦城(文政8年没)はその著『梧窓漫筆』で、「戦国ノ時ニハ男色盛ニ行ハレ、孌童ノ中ヨリ大剛ノ勇士多ク出ツ」と述べ、明智光秀の小姓明智左馬介と上杉景勝の近習である直江山城守の名を挙げている。しかし、この男色の風習は薩摩において際立っていた。氏家幹人によると「四人に一人は武士という特殊な人口構成を維持していた薩摩藩」には「郷中」という青年団体があり、薩摩武士育成の教育的役割を担った。彼らは年齢に応じて14、5歳までの元服前の「稚児」と元服後から妻帯するまでの24、5歳の「二才」に大別された。氏家はこの両者間の親密な関係に同性愛の匂いを指摘している。

されば、討ち死にした薩摩勢500余人の多くが、青年と少年のペアでの組み合わせで構成されていた可能性がうかがわれ、それぞれがお互いにいれずみを彫ったとする前述の松田の表現が真に迫真的である。筆者はそれぞれの組み合わせの、その腕には戦へ出向く以前に、すでに、少なくとも相手の名前がいれずみされていた可能性を想うのである。つまり、彼らはいれずみを施した経験があったのではないか。それは相手に対する誓いの印、起請彫のいれずみである。であればこそ、討ち死に前夜に以前と同じように、しかし、今度は相手の腕に相手の名前などを彫り込めたのではないか。そのいれずみは相手の名前を彫ってもらった反対側の腕だったかもしれない。「天正の昔、必死懸命の場の無残な風流であった戦士の刺青は、今衆道柔曼の衾における愛欲の彩りとして甦るのであった」と松田が江戸の衆道のいれずみについて記している。

筆者は、その習俗が少なくとも天正時代から江戸時代の衆道の起請彫としてのいれずみに連続的につながっていたと考えたいのである。吉岡は、薩摩軍団の文字のいれずみは図柄などと異なり、特別な知己・技術は要らないので、痛みさえ我慢すれば、だれにでもできるとした。そして、500人以上ものいれずみを彫ったいれずみ師の存在を否定している。蓋し妥当な推測であろう。さらに当然のことながら、生死を分ける戦のさなか討ち死にを覚悟した薩摩の若い男たちの気持ちの高揚は、痛みなど微塵も感じなかったはずである。

一方、玉林晴郎は、この薩摩のいれずみの話が「事実だとすれば、文字の文身として最古のものである。然し右の文字が書いてあつた事は事実としてもそれが身体に彫りつけてあった文身だか、或は甲冑肌着の類に書いてあったものか解らない」と述べている。松田も「もちろん、『十河物語』のように、刺青とはせず、腰の木札として記録している」のもあると記しているが、しかし、やはり討ち死にした「死屍の刺青」は疑いないであろうと、『安西軍策』『陰徳記』にも腕のいれずみのことが記載され、その流れの『陰徳太平記』のそれを疑いえぬものとしている。

討ち死に覚悟の前夜、春4月まだ夜は寒く風吹きすさぶ戦場ヶ原の月明かりの下で、お互いの腕にその名を彫りあった二人に、薩摩の剛毅をみるか、あるいは「二才」と「稚児」の関係を思い出しての惜別の涙を想うか。妖しく哀しい物語である。

本稿は、松田 修氏の著書に拠るところが特に大きいことを記して感謝する。

(熊本保健科学大学・学長)

文献

香川宣阿(米原正義校注):『陰徳太平記:正徳二年板本,6』,東洋書院,1984.
松田 修:『刺青・性・死—逆光の日本美』,平凡社,1972.
氏家幹人:『江戸の性風俗 笑いと情死のエロス』,講談社,1999.
香川正矩(松田 修・下房俊一訳):『抗争の中で 陰徳太平記(上)』,教育者,1980.
日高 旺:『黒潮の文化誌』,南方新社,2005.
氏家幹人:『武士道とエロス』,講談社,1995.
吉岡郁夫:『いれずみ(文身)の人類学』,雄山閣,1996.
玉林晴郎:『文身百姿』,恵文社,1987.
設楽博己:『三国志がみた倭人たち—魏志倭人伝の考古学』,山川出版社,2001.
佐原 真:『魏志倭人伝の考古学』,岩波書店,2003.